

## 中世の男色慣行と「家」の確立

—社会構造を創った性愛について—

大木 祥太郎

十六世紀日本列島を訪れた宣教者たちの記述からは、男性同性愛（男色）が日常的な風俗であったことが窺える。歴史学はその行為を社会の周縁に位置づけるか個人的な性癖として解釈し、男色という文化の社会的広がりを意識的に削除し無視してきた。

本論文の主題は家父長制や私有財産の継承という社会構造の変革のなかで中世の性愛が実体的意味として機能していたことを考察することにあります。当初は男色のみを扱って叙述するつもりでしたが、できあがってみると中世の性愛全般（男と女の愛・男と男の愛・オヤとコの愛の考察）を家という経営単位を支えるものとして論じたというほうが正確かもしれません。

中世の男色は不自然な人間関係から生まれるものではない。まして前近代の性愛の基準は肉体と精神を分離しない「色」という精神構造があつたがゆえに生む「性」としての女と、生まざる「性」としての男はかなり不分明な位置づけであつた。そうした中世社会の中で性愛という精神的観念的な衝動にかられての行動は家の継承という現実的意

味での生活領域を再生産する紐帯として重要な意味をもったのである。また、さらに原因と結果の間には、さまざまな円環および共生関係が存在していたということも明らかになった。

以上、本論文で展開してきた議論の多くはこうした二つの要因の結び目からなるものであった。

石井進氏の遺書となった『中世のかたち』（日本の中世Ⅰ・二〇〇二年・中央公論社）の冒頭に中世の五つの特色があげられているがその第三番目に「人間の鎖」の網の目が全体をおおうというのがあるが、簡単にいうと本論文は、この石井進氏の提言を性愛ということがらを通して考察したということになるか。つまり、性愛を文化史としてではなく、社会史・経済史として論じてみたというのが本論文の特徴といえる。

第一章では男色行為として表れる種々の社会的作用を論じており、第一節では社会福祉（保障）との関連において言及し、第二節では男色関係が生み出す人間関係の再認識機能と暴力的手段の回避機能について論じてみた。第三節では若衆の実利と社会流動性との関係を論じた。第四節では、文学作品中にシンボリックに表れる若衆像の考察から若衆に求められた理想像を考察している。

第二章では家という経営単位を支える不可欠な要素として主に、男と女の愛・オヤとコの慈しむ愛という視点から考察しており、家の結束力は開放性を伴った両者の積極的な性愛によってなりたちえていたと論じてみた。

第三章では、社会条件に規定された家を考察し、男色を発生させる要因を社会の構造的特質として捉えることを目的に論じている。

人はいつの時代でもどんな社会でも時代と社会環境に順応して多様な手法で生殖をコントロールしたし、生活水準の維持獲得のために家内規模を意図的に制限し合理性をもって構成されていたのである。

史料としては、宣教師の日記、公家の日記、寺社の記録、文学作品などを中心として使用した。